

ムーンメモリア・ロストノイズ
十六話…冒険者、やる気に満ち溢れる。

雨和七瀬

ミナートに帰り着いた翌日に、一行は冒険者ギルドの本部に向かった。掲示板から受けた依頼の貼り紙を剥がしてから重い扉を開く。ブランカは飛び込む勢いで建物に入ったが、受付には先客がいたためにルークが首根っこを掴んで止めた。受付嬢は大きな書類綴じをペラペラとめくり、中ほどの頁で指を止めた。

「……先日受注されたようなので、運が良ければ近日中に……」

「そうですか……はあ」

受付の前で溜め息を吐く女性の姿に、ルークは見覚えがあった。話しかけるのを躊躇っていると、先にブランカが飛び出した。

「武器屋のお姉さん、こんにちは！」

ブランカが声を掛けると、武器屋の店員はくるりと振り向いたが、ブランカの顔を見て一瞬目を泳がせた。ブランカが手を振ると、その手を見て目を見開いた。

「あ、数日前に来店された槍使いさん！　こんにちは！」
顔が若干ひきつっているものの、武器屋は表情を切り替えて笑顔を見せた。

「見てください、これ！」

ブランカは手に持っていた包みを解いて、剥がしてき
た貼り紙と一緒に受付の机に置いた。

「……あら」

「アオガネトカゲの鱗じゃないですか。……もしかして！」

驚きを隠せない武器屋の店員に、ブランカは胸を張って答えた。

「依頼達成、つてやつです」

感極まっただけか、武器屋は目を輝かせて口をパクパクさせていた。それを見て受付嬢はふふ、と笑いながら鱗を手に取り、武器屋に差し出した。

「スミノさん。せっかくなので、納品状態をご自身で確かめください」

スミノ、と呼ばれた武器屋の店員は鱗を受け取ると真剣な顔つきで隅々まで鱗を吟味し始めた。その様子を、ルーク達も固唾を飲んで見守った。スミノは鱗に耳を当て、裏からコンコンと軽く叩き、口角を上げた。

「一級品の鱗ですね、こんな良い素材を頂けるなんてありがたいです！　冒険者さんは槍がご入用でしたよね、三日……いえ、二日でご用意いたします！　それではご来店お待ちしております……」

気が付けばスミノは既にギルド本部を飛び出しており、元気に「待ってまーす！」と返事をするブランカ以外は呆気に取られていた。

少しして報酬を受け取ったブランカが部屋の隅でその袋の中を覗くと、銀貨がぎゅうぎゅうに詰め込まれていた。ブランカはその価値を測りかねてルークにも袋の中身を見せた。ルークはそのおおよその枚数を数えると指を折る。

「魔導書が二冊買えるくらいだな」

ルークが声色高めに伝えるが、ブランカは首を傾げるばかりだった。ルークは伝わらなかったことに若干肩を落としつつ、他の物に換算しようと考え始めたが、ユノが先に答えた。

「城下町の赤苺のケーキが十五個買えるぞ！」
ブランカは分かりやすく目をキラキラとさせた。

賑わう市場の大通り、ルークの前を歩くブランカはその真ん中を鼻歌交じりに歩いていく。ユノが先導して群衆を掻き分けて目当ての露店を探していると、ユノの目には眩しい金属の反射光がちらつく店が見えた。

「この店か？」

ユノは振り向いてブランカに話しかけると、「はい、ここです！」と言いながらブランカが前に出てきた。

「いらつしやい、お嬢ちゃん。髪留めから首飾りまで、旅のお供の装飾品が入用ですかい？」

露店商は良く通る声でブランカに話しかけた。

「はい、髪留めが欲しくて……」

「それならこれなんかどうだい？ 小さい魔除けの鈴が付いていて、弱い魔物なら寄って来なくなりますよお〜」
魔除けの鈴、という言葉にルークは思うところがあつたが。

（こういうのは大抵、魔物が寄り付かない効果の根拠は無いが……銀貨一枚くらいの品だ。効果を期待するの間違っている）

小さな鈴が付いた髪留めに興味津々なブランカの顔を見て、ルークは黙っておくことにした。

「おいくらでしょうか」

ブランカは鈴の付いた髪留めを買うつもりで訊ねると、露天商は目を細め、口角を上げた。

「お、買ってくれるかい？ 銀貨三枚……」

耳を疑い、露天商に猜疑の目を向けると、露天商もルークの厳しい視線に気づいて肩をすくませた。

「……おっと失礼、銅貨十五枚だ、です」

適正な価格を提示され、ルークは突つかかるのを止めた。まだ疑っていたユノも髪留めに括りつけられた小指の爪ほどに小さな値札を確認し、うんうんと頷いた。

「これにします！」

露天商はブランカの後ろに居る二人にすっかり震えあがり、ブランカが差し出した銀貨を受け取る手もぎこちなかった。

「ま、まいどお〜……」

覇気を失くした露天商から釣銭と髪留めを受け取ったブランカは弾む声で「ありがとうございますっ」と返し、髪留めを大事そうに握りしめた。

「次は魔法道具を見に行きましょう！」

騙されかけたことに気付いてもいないブランカの綻んだ顔に、ルークは頭が痛くなる気さえした。

ミナートで最も大きな店の看板には『書物、魔法道具、旅支度』と書かれており、その下には旅人や冒険者だけでなく、他国から訪れたであろう商人なども交じり、賑わいを見せていた。

「うへえ、オレ入るのやめとこうかな……」

三人はそれを遠巻きに眺めていたが、その距離でユノは耳を軽く塞いでいた。ブランカはそんなユノに手を伸ばしたかと思えば引っ込めるのを繰り返していた。

「そうか。それなら昼食を何にするか決めておいてくれ」

ユノは少しの間を置き、ニヤリと笑った。

「……おっ、じゃあ隠れた逸品を探してきてやるよ。ブランカも楽しみにしてな」

ユノが縮こまっていたブランカの頭に手をポンと当てると、ブランカは顔を上げた。そしてユノが目を細めたのを見て、ブランカも安心したように微笑んだ。

「おいしいご飯、楽しみにしてますね！」

店の前でユノと別れ、ブランカとルークは店へと入った。店の中も通れないほどではないものの老若男女がそこかしこで品物を見比べたり、旅の道具を買い込んだりといった姿があった。ルーク達のように仲間を連れ立って来ている客も多く、外と同じ喧噪が広がっていた。

「お前は魔法道具が見たいんだったな。何が要るんだ？」

その中でルークは声を張り上げても無駄であると判断し、ブランカに耳打ちした。するとブランカも耳元で話すべくルークの袖を引いた。

「私も魔法道具を使いこなして強くなりたいです」

意外な答えにルークはブランカの表情を確認した。本人は至って真剣に言っているようだった。ルークはどう言ったものかと考えを巡らせ、またブランカに向き合った。

「向上心を持っているのは悪くないが、今は戦いの幅を広げるのではなく鍛錬を積むべきじゃないか？」

「それもそうなんですけど……うーん……」

ブランカも自分の考えを言葉にするのに難儀しているようで、ルークはそれを見て一つ提案することにした。

「……先に知識をつけるのはどうだ」

ルークはブランカに例の如く鞆の肩紐を握らせ、書籍の並ぶ棚へと向かった。この店には冒険者が持ち歩くような薬草や魔物の辞典、ただでなく、読み書きを覚えるための簡単な辞書なども置いてあった。ルークはそれらが置いてある場所までブランカを連れてきた。

「一人で学べるようになるまでは俺のやり方に付き合ってもらおう」

そう口にする中で、ルークは過去の自分を思い起こし、ブランカの様子を窺った。しかしルークの心配とは裏腹に、ブランカはうんうんと頷いていた。

「分かりました、ルークさんがそう言うならそうします」
やはり本気で従う気概が見え、ルークは大陸語辞典を手にとった。中身をパラパラと捲り、見飽きたものと大差ないことを確かめると、ボタンと音を立てて閉じた。

「……目標を決めるか。辞書で勉強する他に、読んでみたい本を一冊決めろ」

「読みたいもの……」

ブランカは近くの本棚から本を引っ張り出すが、表紙を見るとすぐに戻してしまい、「むむ……」と考え込んでしまった。

「……おすすめの本とか、あります、か」

しわしわな口から絞り出されたブランカの声は、余りにも力が抜けきっていた。それを聞いたルークはルークで、あれこれと勧める本を思いついては棄却した。

（ブランカの好きなもの、焼き菓子の本……は専門用語が出てくる割に語学の勉強にならない。興味を持ちそうな勧めたい小説はいくつかあるが、この店には置いていないだろう。旅人向けの旅行案内なら良いだろうか）

「ルークさん」

気が付けばブランカが一冊の本を持って目の前に立っていた。

「見てください、これ」

「それは……」

『今は遙か霧の中』と書かれた表紙。装丁は古臭いが凝られている。それもそのはず、二百年近く前に流行した伝記風にかかれた連載小説の総集編版であり……。

「その小説は話がすぐ十年単位で飛んで、理解するのに無駄な労力がかかる。やめとけ」

「ええー」

「ちえー、不良在庫掃けると思ったのに……あ」

……非常に癖の強い編集のせいでこの総集編は全くと言っていいほど売れなかったのだ。現にブランカを唆したであろう店員も思わず口を滑らしている。その店員とルークは目が合い、ルークが睨むも店員はすぐさま笑顔に切り替え、ルークにすり寄り始めた。

「いやー、完全版は今でも愛好家が多数居るくらいですけど、先々代の店長が『地理や風土の参考になる』って仕入れて以来、値下げしたり抱き合わせにしたりしてよ

「や、最後の一冊になったもんなんですよ。それをね？　このお嬢さんが『綺麗な本』って言って手に取った、これは運命ってやつじゃありませんか！」

だから買えや、というのが顔に書いてある。ブランカの方を見ると、丸い目でこちらに熱い視線を送っている。（装丁で興味を持つのも視野に入れていたが、よりよってこれか……）

ルークは十数年前の過ちを繰り返さないように、気を引き締め直した。

「完全版を今度貸すから、今日買うのは別の本にしろ」

「……わかりましたあ」

「あ、愛作家の方でしたか……そりや無理だな」

ブランカも店員も引き下がりがり、一緒になって小説の置いてある棚まで戻っていった。ルークも後ろからついて行くと、店員がブランカに話しかけるのが聞こえてきた。

「完全版は店長の方針でこの店では扱ってないんで、この大陸について勉強するならやつぱ『旅のしおり』の最新版がおすすめですね」

ルークに聞かれているからか、不良在庫絡みでなければなのか、まとも以上の接客であった。付き添っているルーク以上にブランカのやりたいことを把握している。引き出し方が上手いのだろう。

店員の勧める旅行案内の書かれた『旅のしおり』を飼うことにして、ブランカに持たせた。

「言葉を勉強しながら、この国の事、大陸の事も覚えようと思えます」

ブランカのやる気に満ち溢れる姿を見て、ルークは少し頬が緩みそうになったのを押さえた。

「他に買うものありますか？」

この店で旅の支度全てが整うとはいえ、武器が出来るまでには足止めされることを踏まえ、ルークは首を横に振った。

「今日はこれだけで十分だが……魔法道具に興味があるのなら教えてやっても良い」

そう言いつつも、ルークは商業の町の魔法道具の品揃えに思わず視線が吸い寄せられていた。ブランカが「お願いします」と言うや否や、ルークは早足で魔法道具の棚に向かった。

「気になる物があつたら言え」

ルーク本人、自分が主体になって話し始めると終わらないことは分かっていた。ルークはブランカが魔法道具を一つ一つ見ていくのを尻目に、城下町で見かけない魔法道具を手を取った。

『毛燃懐炉』……ウツドヴァインからの輸入品か）

獣人との文化の違いに関心を寄せていると、背後からブランカに声を掛けられた。

「これ何ですか？」

ブランカが指し示したのは方位磁針の形をした魔法道具で、普段目にするものの少ないものだった。

「それは『魔力方位針』だ。針に一度魔力を帯びたものを近づけておくと、離れてもそれを指し続ける。針に特殊な魔石を使って……いや、なんでもない」

自分で作ったときのことを喋りそうになったが、やはり回りかけた口を噤んだ。しかしブランカはまだルークの方を見ていた。

「特殊な魔石ってどんなのですか？」

「……魔石は本来魔力を帯びていて、呪文や魔法陣、魔力の上乗せで効果を引き出すが、この魔石は自然の状態では魔力を常に放出していて、周囲の魔力の均衡を保つために同じ魔力が存在するのは逆の方向に放出しようとする性質があり、針が傾く。本質的に言えば、『魔力を指す』のではなく、『魔力と逆の向きを指す』道具だ……あつ」

恐る恐るブランカを見る。ポカンとするなり興味を失くすなりしてしまったかとルークは予想していたが、ブランカはルークの話に耳を傾けていた。

「じゃあ反応してるのは逆の方向を指してる針ってことですか？ すごい、思いついた天才じゃないですか！」

「……どうだろうか」

ルークはブランカが手に取っていた魔力方位針を棚に戻した。

「あ、ルークさん……」

ブランカが目を向けた先、ルークの口元が笑みを浮かべている。ここでブランカの時間は止まってしまったのだった。

〈十七話へ続く〉